委 員 長 報 告 書

経済建設委員会は、平成28年7月19日（火）、20日（水）の２日間　岐阜県美濃加茂市において 流域下水道事業について 、同県岐阜市において 「信長公のおもてなし」が息づく戦国城下町・岐阜市として、日本遺産に認定されたことによる観光戦略と今後の取り組みについて、視察研修を行いました。

以下その概要について報告します。

記

美濃加茂市

市制施行	昭和29年４月１日
人　　口	55,951　人
世 帯 数	21,475 世帯
	（平成28年４月１日現在）
面　　積	74.81ｋ㎡

美濃加茂市は、岐阜市の中南部に位置し、木曽川と飛騨川の合流点にあり、中山道51番目の宿場「太田宿」として賑わいを見せていた。

宿場町として栄えたまちということもあり、現在も交通の要衝（国道 21 号、41 号、248 号や JR 美濃太田駅、東海環状自動車道美濃加茂インターチェンジ）として近隣市町村の商業の中心地として栄えてきた。

現在は、大型商業施設や大手企業が工場を構える工業団地などがあるほか、特産品である、約1000年の歴史がある「堂上蜂屋柿」の伝統と技術を受け継ぎ、今や全国でも有数の地域食品ブランドとして評価を得ている。

視察事項

【流域下水道事業について】

１．下水道事業全般について

事業の経緯は、昭和 61 年から着手、昭和 63 年から本格的に工事が開始される。平成６年に流域下水道と農業集落排水事業の処理場 1 か所が供用開始になる。その後、単独の公共下水道処理場が１か所、農業集落排水事業の処理場があと２か所供用開始になる。

現在、農業集落排水事業も含めた下水道計画面積が 2,648 ha、そのうち整備済面積が 2,173ha で 95.6%、水洗化率は 84.6%に達している。（H27年度末）

汚水処理の手法としては、公共下水道、主に市街地の区域外を整備する特定環境保全公共下水道、(特定環境保全公共下水道を流域へ取り込んでいる。)、農業集落排水、合併浄化槽の４種類の手法で処理をしている。

北部地域が合併浄化槽、南部の木曽川沿いは流域下水道へ流している。

主な資産は、単独公共下水道処理場が１つ、農業集落排水事業の処理場が３つ、下水道管路については 475 ㎞、その他マンホールポンプ 111 か所がある。

この他、雨水排水施設として、木曽川に内水排除７か所のポンプ場を持っており、管渠については 440 ㎞の雨水排水管渠を持っている。

下水道使用料は、公共下水道、農業集落排水も同一料金で、従量制をとっている。10 ㎥までは税抜きで１㎥当たり 140 円、11 ㎥から 50 ㎥は 150 円、51 ㎥から 100 ㎥までは 160 円の単価である。

２．流域下水道事業について

美濃加茂市では、年間 600 万トンの汚水を処理しており、そのうち 75%を流域下水道に流している。流域下水道は、4 市 6 町からなっており、計画処理面積が 17,540ｈａ、処理人口としては 456,720 人、計画処理汚水量は 249,500ｔ（一日当たり)、岐阜市、各務原市、美濃加茂市、可児市などで構成している。

維持管理負担金は、昨年度までは１㎥当たり 53 円を流域事務所へ支払していた。今年度から３円値上げし、税抜きで 56 円の維持管理負担金を支払っている。市の職員体制は、上下水道課で 20 名、窓口業務は外部委託者６名で行っている。

３．下水道使用料単価に対する維持管理負担金の割合について

下水道使用料収入と維持管理負担金について、平成 27 年度は、使用料の収入が５億 4647 万 2 千円、維持管理負担金が 2 億 4078 万 6 千円で、使用料収入に対する維持管理負担金の占める割合は 44%である。

平成 24 年度は、使用料収入が５億 4579 万 5 千円、維持管理負担金が 2 億 1881 万 7 千円で割合は 40%であり、年々使用料収入に占める維持管理負担金の割合が若干増えてきている状況がある。

また、不明水が入っており、それに係る維持管理負担金が 7%から 8%ぐらい負担金増となって支払っている現状があり、下水道の経営を圧迫している要因の一つと考えられるため、今後改善が必要な点である。

４．企業会計に移行したことによるメリット、デメリットについて。

美濃加茂市は、平成 24 年度から企業会計の法適用を講じた。

企業会計導入による効果

① 使用料の適正算定が可能になり、経営計画を適切に策定できる。

② 職員のコスト意識、経営意識の向上を図ることができる。

③ 上水道部局と会計方式、職員身分の統一ができ、組織が効率化できる。

④ 住民に対する経理状況や使用料の説明が容易になる。

⑤ 消費税の節税

企業会計導入により生じる課題

① 日常経理に複式簿記等（仕訳、伝票処理、帳簿記帳）の専門知識が必要であり、その習得に時間がかかる。

② 「分流式下水道等に要する経費」の算定方法の変化により、資金不足額が一時的に増加する。

５．下水道未整備区域に対しての対応と、接続を促進する施策について。

未整備区域については、新たに下水道区域を拡張して整備する計画はない。その区域については、合併浄化槽で水洗化してもらう対応。合併浄化槽については､助成事業があり 50 人槽で 60 万円少しの助成を行っている。

接続を促進する施策は、水洗化率も約 85％あることから、積極的に広報はしていない。年１回広報紙においてＰＲする程度。悪臭等の苦情が出た場合にのみ、個別訪問して対応し下水道への接続依頼を行っている。

６．事業費削減のための対策（計画）について

農業集落排水の維持管理費が賄いきれていないことが、美濃加茂市の下水道の課題であり、流域下水道、流域関連公共下水道へ統合する計画と、農業集落排水を単独公共下水道へ統合する計画で統廃合を進めていく。

ＰＦＩ事業については、現在処理場は、「下水道の整備に伴う一般廃棄物処理業等の合理化に関する特別措置法」により、一部市内の民間し尿処理業者に委託している。これは代替業務として委託先に選んでいるため、当面は一部委託という事で進めている。

今後は長寿命化計画、ストックマネジメント計画を作成し、維持管理、経費の削減に努めていく。

岐　阜　市

市制施行	明治 22 年７月１日
人　　口	412,589　人
世 帯 数	175,371 世帯
	（平成 28 年４月１日現在）
面　　積	203.60 ｋ㎡

岐阜市は、日本のほぼ中央に位置しており、市内の中心部を清流長良川が流れており、緑豊かな金華山がそびえた自然にあふれたまちである。また 1300 年の歴史をほこる長良川鵜飼や、信長公ゆかりの岐阜城など歴史のまちとしても知られ、国際会議観光都市としても発展を続けている。

平成 18 年に隣接する柳津町と合併し現在に至る。岐阜市へのアクセスは JR の新幹線と在来線を利用した鉄道で、東京から約 2 時間 30 分、大阪から約 2 時間、名古屋からは在来線で 18 分となっている。

視察事項

【「信長公のおもてなし」が息づく戦国城下町・岐阜市として、日本遺産に認定されたことによる観光戦略と今後の取り組みについて】

１．岐阜市の観光資源について

〇長良川鵜飼について

鵜飼は鵜匠が鵜を操って鮎を捕まえる伝統漁法で、岐阜長良川の鵜匠は宮内庁式部職として世襲制で受け継がれており、6 人の鵜匠がそれぞれ屋号を持って行っている。

全国で鵜飼を行っているところは 14 か所あるが、宮内庁式部職として任命されているのは、岐阜と関との２か所である。

「ぎふ長良川鵜飼」は平安時代から 1300 年以上続いており、仲秋の名月の日を除き、毎年５月 11 日から 10 月 15 日までの間開催されている。

平成 27 年３月に、長良川の鵜飼漁の技術が、国の重要無形民俗文化財に指定され、同じく 12 月に、清流長良川の鮎が、世界農業遺産に認定された。世界農業遺産に認定されたことから、今年７月第４日曜日に「鮎の日」として行事開催を予定している。

鵜飼観覧船乗船者数は、昭和４０年から統計を取っているが、昭和４８年のピーク時には３３万７千人であったが、近年は１０万人を超えたところで推移している。

○岐阜城について

岐阜城の始まりは、鎌倉時代に築かれた砦とされているが、戦国時代には斎藤道三公や織田信長公が居城としたお城である。難攻不落の城として知られ、織田信長公は安土城築城までの約１０年間、この岐阜の地を天下統一の拠点とした。

スタンプラリー帳を作り、織田信長公が居城とした清洲城、小牧城、安土城が所在している、清洲市、小牧市、近江八幡市と連携して４市の回遊性を高める事業に取組み、観光振興に努めている。

現在の天守閣は昭和 31 年に復元されたもので、標高 329m の金華山の山頂に位置しており、濃尾平野を一望することができる。岐阜城の天守閣からの 360 度の夜景をＰＲする岐阜城パノラマ夜景パンフレットを作成し、ゴールデンウィーク時の４月中旬から 10 月中旬までイベント実施している。

○長良川温泉について

長良川温泉は、奈良町を中心に長良川沿いに広がる温泉街で、観光経済新聞社が主催する「にっぽんの温泉１００選」に５年連続で選ばれ、この地位を継続するための取組みとして、旅館・ホテルの若女将と女性スタッフで、長良川温泉若女将会を構成している。会では女性ならではの感性を生かし、リピーターの確保に繋げるための温泉地域づくりに取組んでいる。

平成 23 年からは観光業界や地域住民が主体となって、体験交流プログラムとして「長良川温泉博覧会」を開催し、花街文化、鮎菓子作り等を体験できる体験型観光への呼び込みを行っており、参加者が年々増加している。

長良川温泉宿泊者数は年々増加し、平成 27 年度の実績は約 32 万人の宿泊者数であった。外国人も増えておりインバウンドへの取組みとして、中部地方の観光エリアを「昇竜道」と名付け、名古屋空港から北陸まで日本の竜をかたどった観光ルートを設定している。その効果もあり長良川温泉では外国人観光客が５万人ほどあり、全体の約 15%となっている。

○河原町について

河原町は江戸時代に河湊として栄え、格子戸の古民家が軒を連ねる街並みで、古い時代と現在の風情が心地よく同居している。舞子に逢える町屋カフェ、キモノ着付け体験や和菓子作り体験など、国内外からの旅行者に向けた体験プログラムを提供する民間団体の活動により、岐阜市の伝統・文化を体験できる。

また、清流長良川の鮎や世界遺産になった美濃和紙を使用した団扇や岐阜の提灯、和傘など伝統工芸品に触れることができる。

現在、国土交通省の DMO 設立の取組みをしているところで、岐阜市でも

長良川のつながりで、長良川の源流をなしている郡上踊りで有名な郡上市、本美濃紙がユネスコ世界遺産に登録された美濃市、刀や刃物の産地として有名な関市と長良川流域の市で連携をし、本年度、長良川流域観光推進協議会を立ち上げ、４市の周遊性を高める事業の取組みを始めた。

２．まちなか観光について

中心的な役割を果たしているのが、まちなか案内人であり、岐阜市のまちなか案内人は、ご当地検定であり、「岐阜市まちなか博士認定試験」に合格した人の有志で結成された観光ボランティアガイドで、平成 20 年から活動している。現在の登録者は 50 人。

案内時には、水色の帽子、ポロシャツ、ブルゾンを着用し、岐阜公園の周辺や河原町を中心に活動している。多くの観光客に岐阜市を知ってもらうために、「金華山歴史探訪登山」や「岐阜町歴史探訪町歩き」など独自に企画し活動している。

３．岐阜市の祭り、イベントについて

２月全日本学生落語選手権は、岐阜市にゆかりのある安楽庵策伝を顕彰して開催しているもので、本年度は 14 回目で、審査員に落語家の桂文枝師匠　立川志の輔師匠を迎え開催予定である。落語選手権のこれまでの実績をまとめた冊子を作成している。

４月の道三祭りと 10 月の信長まつりは、郷土が生んだ英雄を追悼し偉業をたたえて開催しているもので、それぞれ２日間のパレードなどは、町の中を祭り一色に盛り上げてくれるものである。

夏には長良川河畔において、全国的に有名な２つの花火大会が、どちらも３万発という規模で開催される。市内はもとより名古屋市をはじめとした東海地域からも毎年多くの見物客が訪れる。

４．岐阜市の日本遺産について

鵜飼、岐阜城、河原町等々、これまでの岐阜市内の歴史的な文化資源、魅力的な観光資源を１つの心惹かれるストーリー、物語として結びつけることができないかという趣旨の「日本遺産」への申請依頼が文化庁からあった。

信長公がかつて岐阜で行ってきた来客者に対するおもてなし、山の上の岐阜城で素晴らしい景色を眺めていただき、食事をふるまい、鵜飼見物も実際行っていたという記録を基に、観光的なストーリーを作成し、昨年、「日本遺産」第１号の認定を受けた。

岐阜市のストーリーの特徴

・人物がいると話に入り込みやすいことから、主人公や脇役がいる物語
・東京オリンピックを意識した日本遺産の趣旨に合致した、世界を意識した物語
・今までに知られていない信長公の一面に焦点をあてた意外性のある物語
・現在の岐阜市観光につながる追体験できる物語

５．日本遺産の取組み

・のぼり旗、横断幕作成（100 本）
・日本遺産紹介リーフレット作成（４万部）
・まっぷる岐阜市　信長公のおもてなし作成（３万部）
・信長公ＰＲバッジ作成（４千個）
・日本遺産認定記念特別展「先人からのギフト」
（H27 歴史博物館で開催　4,890 人）
・パネル展示（メディアコスモス、岐阜公園発掘案内所等）
・各種イベントでの情報発信
（フランスや東京のツーリズム EXPO ジャパン等）

今後の取組みとして、平成 29 年度は 2017 年であり信長公が岐阜城に入城し､岐阜と命名した 1567 年から数えて 450 年という記念の年になるため、来年に向けて専門部署を設置し、「岐阜市信長公 450 プロジェクト」と銘打ち各種イベントを実施する予定。日本遺産と 450 プロジェクトは、一体で推進していく。

歴史読本「岐阜信長歴史読本」を作成し、今年度末に刊行予定。

2020 年のオリンピックを次の目標に掲げるとともに、長良川鵜飼文化をユネスコ文化遺産にというのが岐阜市の目標である。

なお、詳細については、議会事務局に資料を保管していますので、ご覧ください。